# あびこの文化

発行人
美崎 大洋
我孫子市
高野山
250－23
04(7182)
0861

## 令和二年度総会

今年度の総会は新型コロナウイルス感染防止のため集合しての総会は行わず会員宛て書面による通達で行った。

改めて各議案の内容について以下の通り決定したことを確認する。

第1号議案　令和元年度事業報告

一、嘉納治五郎銅像建立プロジェクトの推進
二、「四十周年記念誌」作成の企画と推進
三、総会、文化講演の開催
四、史跡文学散歩の実施
五、放談くらぶの開催
六、文学の広場掲示板への短歌6首掲示（年3回）
七、「美しい手賀沼を愛する市民連合会」への参加
八、文化活動関係団体との連携協力
九、プロジェクト活動への全員参加を進める
十、白樺派についての継続的研究・勉強
十一、我孫子市生涯学習出前講座への講師派遣
○第十二回ベイ・東葛エリア観光ボランティアガイド交流会に参加

第2号議案　令和元年度決算及び監査報告

**決算の内容について、芦崎敬己監査役からの「適正に処理されている」との監査報告があった。**

第3号議案　役員選任

（顧問）越岡　禮子、（会長）美崎　大洋
（副会長）伊藤　一男、村上　智雅子
（幹事）戸田　七支、斉藤　清一、佐々木　侑
佐藤　やす子
（会計幹事）稲葉　義行
（監査）飯高　美和子、芦崎　敬己

第4号議案　令和二年度事業計画

一．嘉納治五郎銅像建立プロジェクトの継続推進とフォロー
二、「四十周年記念誌」作成の企画と推進
三、総会、文化講演会の開催
四、史跡文学散歩の実施
五、放談くらぶの開催（原則、偶数月第1日曜日午後2時～）
六、文学の広場掲示板への短歌6首掲示（年3回）
七、「美しい手賀沼を愛する市民連合会」への参加
八、文化活動関係団体との連携協力
九、プロジェクト活動の活性化
十、白樺派についての継続的研究・勉強
十一、我孫子市生涯学習出前講座の推進

第5号議案　令和二年度予算

**（内容は省略）**

以上

### 「四十周年記念誌」についてのお願い

かねて会報にてお知らせしておりますが、今年度は当会が創立されてから丁度40年になります。会員の皆様の参加とご協力によって記念誌を編纂、作成したいと思っています。

就きましては、「原則全員参加」を主旨として、会員の皆様には、次に示す色々な形で原稿提出をお願いしたいと考えています。

**①　論文、小論文**
**②　随筆、日記**
**③　短歌、俳句など**
**④　随想など（④については同封のハガキに記載の上、返送下さい）**

（例・我孫子の文化を守る会について、普段感じること、こんなこと、あんな事・・・）

註・ハガキのマス目が小さく書きづらい場合は、マス目を無視し別の紙を貼って書いて下さい。

①～④について複数点の提出も可能です。

●原稿の締切日　10月10日

## 治五郎夫人・須磨子と実家竹添家について
### ―貴重な写真の紹介

4月15日に当初のほぼ予定通りに嘉納治五郎銅像が建立されてから、新聞各紙が報道してくれたこともあり、およそ2か月間にわたり、あちこちから電話やメールなどで祝辞などを頂いた。中には何年も会っていない旧友からの懐かしがっての電話もあった。

6月のある日、「地域新聞を見た」と勝木隆氏より突然電話があり、「是非お会いしてお話したいことがある」ということで翌日、我孫子市役所で会うことになった。その日はたまたま土曜日ということもあり、市役所のドアは閉まっており、すぐ近くの拙宅に来て貰った。

初めてお会いする勝木氏は熊本県天草のご出身で治五郎の須磨子夫人とその父である竹添進一郎氏についての情報を提供してくれた。ご本人は「東京天草郷友会」の会員という。

**東京天草郷友会**

東京天草郷友会は、明治八年（1875）上京した竹添進一郎氏と、明治三十年（1897）に上京した中井励作氏が中心となって、『天草出身者の親睦と互助』を目的として発足された会である。郷土と東京の橋渡し及び東京を中心とした地域の天草出身者の互助、情報交換、郷里からの上京者の支援が主な活動という。

**竹添進一郎**

竹添進一郎（字（あざな）は漸卿（ぜんけい）、幼名は満、のちに進一郎と改めた。号は井井（せいせい））

東京天草郷友会の創始者・竹添進一郎は、天保十三年（1842年）、肥後天草郡上村（現・熊本県上天草市大矢野町）の医師竹添筍園の四男として生まれる。幼少より学を好み、3歳にして経書を朗読し、神童の誉れ高く14歳の時、熊本の儒者木下韡村（いそん）の門下生となり、後に細川家に仕え、また熊本の玉名で私塾を開いた。

明治八年、34歳の時上京し、勝海舟の斡旋で、清国特命全権公使森有礼の随行員となった。その後、森の

口添えもあり、伊藤博文に認められ、大蔵省書記官となり、明治十三年(1880年)には天津領事となった。

明治十五年には朝鮮の京城公使となり、京城事変の時は、居留民保護のため、日本軍一個中隊を指揮して防戦に努めた。

明治二十八年(1895)には、天草人としては初めての東京大学の教授となり、約2年間その職にあった。小田原に転居後、当時皇太子であった大正天皇の進講の栄に浴し、大正三年(1914年)には、天草第一号の学士院会員に推され文学博士となった。

大正六年(1917年)76歳で歿した。

竹添夫人・亀子は篤実温厚な人で、進一郎の業績もこの夫人の内助に負うところ大きかったことは、知友のひとしく認めるところであった。

竹添夫妻の次女・須磨子(すまこ)が嘉納治五郎の妻である。

**嘉納須磨子**

治五郎は明治二十二年九月、第一次外遊の途につき、欧州諸国を歴訪し二十四年一月に帰国した。しばらく姉の勝子(夫は柳楢悦)の家に寄寓していたが、その年、竹添進一郎の次女須磨子との縁談がなり、八月七日柳家で結婚式を挙げた。媒酌は両家と親交深かった第一高等中学校長木下広次夫妻であった。同年九月、治五郎は第五高等中学校長に任じられ、単身熊本に赴任した(二十六年二月帰京)ので、新婦・須磨子はそのまま東京にとどまり(柳楢悦家で預かり)、姪の柳直枝子らと華族女学校(明治十八年、下田歌子らにより設けられた学校。華族子女の教育に携わったが、明治三十九年合併により学習院女学部となった)への進学を続けた。

後に治五郎が道場を運営するにあたって、須磨子の功績は非常に大きく、治五郎の門下生の多くが、彼女を母のように慕ったという記録が残されている。

須磨子夫人は、竹添家の次女であったが、姉が4歳で夭折したため、ひとり娘として育った。のちに嘉納の長男・履信が竹添家を継ぐようになったのも、竹添夫妻の切なる希望を尊重した故であった。治五郎が長男を他家に養子にやるというのも不思議な感じもするが・・・・。

**嘉納履信(洋画家・歌人)**

竹添家の養嗣子(家督相続人)となった治五郎の長男・履信について改めて触れたい。

明治三十年、嘉納治五郎・須磨子の長男として東京市小石川區富坂町にて出生。

明治三十七年四月四日、祖父竹添進一郎(須磨子の父)の養嗣子となる。

大正四年(13歳)四月、東京高等師範学校附属中学校を卒業。

大正六年「創作」3月号に「嘉納登仙」の筆名にて短歌を発表。同年三月三十一日、祖父進一郎死去。

大正八年「創作」7月号誌上より「二九十八」の筆名に変更。

大正十二年、春陽会第一回展覧会に出品入選。同会に国畫会創設されるとその会に移り、引き続き出品。

大正十三年「創作」10月号誌上より本名「竹添履信」を用いる。

大正十四年(29歳)、早川一子(いちこ)と結婚。

大正十五年、長女佑子誕生。十月神奈川県小田原町に転居。

昭和二年(31歳)、長男信之誕生。

昭和三年、欧州諸国の美術研究のため外遊。

昭和五年、帰朝。

昭和九年九月十四日、小田原の自宅にて死去(38歳)

治五郎の死後、天神山の別荘に、竹添履信の未亡人・いち子、長女祐子、長男信之3人は、須磨子と治五郎の三男履方と共に移り住んだ。

その後、須磨子は昭和二十年、履方も同二十一年列車事故で死去(34歳)。

**貴重な写真を紹介される**

勝木氏は東京天草郷友会の創始者竹添井井氏の情報と共に一枚の写真を持参していた。

勝木氏から紹介されたその写真(竹添家が保存?)は嘉納家としても珍しい写真といえる。すなわち治五郎は三男五女の子宝に恵まれたが、全員が一堂に会して写っているものは、ごく珍しいものだからだ。

写真は大正三年正月、小田原の竹添家で写したもので、前列に竹添進一郎氏と夫人を挟んで治五郎夫妻が座っている。須磨子夫人の膝には大正元年七月に産まれた三男の履方が抱かれている。後列右端は既に竹添家の養嗣子に入っていた履信が立っている。明治三十年三月生まれだから十七歳になる。左端に立つのは二男の履正。

今まで、灘の嘉納家や治五郎の父・治郎作の実家・生源寺家については会報に掲載したことがあったが、竹添家についての資料を見たのは初めてだったので、勝木氏にお会いできたのは貴重であり嬉しいことであった。

(美崎　大洋)

**4月15日に嘉納治五郎先生の銅像が出来上がり大変喜ばしいと思う一方、一般市民はどのような思いでいるのか、特に市内の市民活動団体の方々はどう感じているのか気になることもある。**
**そこで特に普段親しくお付き合いしている団体の各会長から寄稿して頂いた。**

## 祝 快挙！！ 新しいスタート地点に

我孫子市史研究センター　会長　関口　一郎

嘉納治五郎翁の銅像建立、心からご祝詞を申し上げます。

オリンピックというビッグイベント、治五郎生誕160年という格好の節目はあったものの、2年という確実に迫りくる期間のなか、「なぜ我孫子に？」を、全国に周知し、行動に移してもらうには大変なエネルギーが必要だったと思います。賛否両論あったことも推測されます。しかし、この機を逸したらチャンスは2度とないことも事実でした。

われわれの会も計画を知って、どういう協力の仕方があるのかを具体的に協議するまでに、情報不足もあり手間取っていました。しかし、会報で全会員に呼び掛け、各部会の集会(学習会)でも話題性を高め、拡げるよう微力ながら努めました。今回の大事業にどこまでの後押しができたかは心許なく、判断は主催の皆さまにお任せするしかありません。

社会状況も好調ではなく、ましてや最終段階に至ってコロナ旋風という、人知を超えた次元からの来襲に翻弄され、とうとう総べての事業活動が止まってしまいました。新しい銅像の式典には、ぜひ参加をと期待していたのですが、それも叶いませんでした。

しかし、主催者たる「守る会」では、美崎会長を先頭に、幹部諸兄姉がノルマンディー上陸作戦を彷彿させる機敏な行動で、銅像の開幕(解幕)は見事に成功しました。おそらく、実施にはギリギリまで周到な準備・連携が交わされたことと想像します。

さて、嘉納治五郎翁の銅像は、「天神山緑地」という手賀沼を眼下に臨み、我孫子でも最上の好適地に威風堂々と立っています。全国に何ヵ所も建てられている嘉納治五郎銅像の中でも最高の立地です。治五郎翁も満足されているはずです。

ただ、この銅像建立の本当の評価は、これからの更なる「治五郎研究の継続、発掘」如何(いかん)ということになるのではないでしょうか？これまでの治五郎像(プロフィール)にはない、他地域とは違う「我孫子の治五郎」の追跡。決定版ができないか、我孫子での治五郎翁の息遣いを、もっともっと発掘できないか、などの期待です。容易なことではありません。治五郎翁が船上で客死されたことも、翁と我孫子の関わりの消失に大きく影響していることも確かです。

でも、今回の事業展開で全国区へのパイプもできました。新しい銅像の発信と同時に埋もれている資料発掘の呼び掛けも以前よりやり易くなりました。たしか、銅像建立呼び掛の過程でも、思いがけない話や出会いがあったこともうかがっています。ある面で、我孫子の治五郎翁研究のスタートではないでしょうか。

もう一つ、事業として検討されていることと思いますが、イベントの継続です。例えば、

「親子が集まる―文武一道塾―志道館と我孫子」などの恒例化ができれば、両者の知名度も上がると思います。我孫子市からの補助金も狙えるのでは・・。

言うは易し、で勝手なことを述べてきましたが、我孫子に立派な文化遺産が形になって実現しました。ありがたいことです。関係各位にお礼を申し上げます。

## 嘉納治五郎銅像建立おめでとうございます。

我孫子の景観を育てる会　会長　中塚　和枝

嘉納治五郎銅像建立おめでとうございます。

天神山緑地の別荘跡地に建立されたことは誠に意義のあることです。

この地に別荘を構えたことで我孫子の白樺派、民藝が育ったといっても過言ではありません。銅像が我孫子の新しい拠点となり、訪れた人達はまずここから手賀沼を眺め、東に志賀直哉邸跡、西に旧武者小路実篤邸跡、それをつなぐ坂道、ハケの道へと散策に出かけるでしょう。

本来は大勢の皆さんとともに除幕式などお祝いをするところでしたが、世界中を恐怖に陥れた「新型コロナウイルス感染症防止拡大」のため、式典もなく、密やかなお披露目となったのは、彼が我孫子に残した功績を考えると非常に残念です。

嘉納治五郎が旧制第五高(現熊本大学)で校長していた時の学生だった村川堅固も我孫子に別荘を持ち、その村川堅固、嘉納治五郎、杉村楚人冠は「手賀沼保勝会」を起こしました。

杉村楚人冠が書き残しているものなどによれば、國民新聞が大正5年に今後の理想的郊外生活地「誰にも住み心地の佳い理想的の土地は？」と投票を募集したところ、一等府中町、二等市川町、三等我孫子町でした。

当時我孫子は上野から1時間15分のところにあり、川瀬巴水の版画(写真)のような、空に雲の湧く手賀沼が高台から眺められただろうと想像できます。手賀沼の北岸の高台に別荘などの新住宅地があり、その一帯は松林と丘陵とで北風を塞ぎ、南に陽射しを受け、冬は温暖、夏は沼から風が吹き、涼しい。その頃の我

孫子の中心地は子之神付近で、多数の別荘がありましたが、高野山、白山、根戸辺りの沼が見える広大な住宅好適地が広く残っており、そこは松林だから理想的な新住宅地を作るのは簡単だろうと述べています。町長以下、町の有志は東京人を大いに歓迎し、新住宅地を欲しい人々の為に正統な協定を結ぶと言っていると楚人冠は喜んでいました。

手賀沼は眺める場所によって趣が違うが、どこから眺めても素晴らしい。特に高野山からの眺望が一番よい。だが、高野山は我孫子駅から子之神付近より少し遠いだけなのに、住宅地として未開拓であると嘆いています。

子之神の高台から沼を眺めると、晴れた日は西の方向に裾までの富士山が見え、沼に映る。雪の逆さ富士は高野山でも白山でも眺められる。沼の誇りだとまで書いています。手賀沼抜きで「理想的郊外型住宅地」は考えられない様です。彼は我孫子町の優秀な宣伝マンです。

さて、「誰にも住み心地の佳い理想的の土地は？」の投票で「3等我孫子町」の栄冠をいただいてから約100有余年過ぎました。その間、嘉納治五郎がオリンピックのボート競技場の誘致を願っていた手賀沼は、第2次世界大戦後の農水省直轄干拓で、広さが戦前、戦後で約2分の1となりました。

楚人冠の描いていた「理想的郊外型生活地」はどうなのか。将来の人口減や、人々の景観、環境に対する意識も定着しつつあるので、これ以上の乱開発や破壊はなく、ピークは過ぎたと思いますが、油断をしないで、見守っていきたいと思います。

手賀沼を真正面に見据えて建つ嘉納治五郎は何を考えているのか、やはり次の100年先を考えているのであろうか。

## 我孫子を愛した嘉納治五郎

ふるさと我孫子ガイドの会　会長　中込　力三

和服姿の嘉納治五郎銅像が手賀沼を見下ろしている姿は、とても良く似合う。

我孫子別荘が嘉納にとって一番に安らぎを得られた場所ではないかと想定すると、今回実現した銅像建立は、やっと嘉納に安らぎの場所をプレゼントしたことになる。

この銅像をこれから多くの人が見て、建立の意義を読み解き後世に伝える事にもなる。

「我孫子の文化を守る会」が中心となっての銅像建立はまさに偉業であり、ご努力に敬意を表するとともに、これから観光のシンボルの一つに成ることを期待する次第です。

当会のふるさと我孫子ガイドの会は、銅像建立に合わせて、一昨年、嘉納治五郎について一年間深堀を行い、新たな嘉納治五郎を見出すことが出来ました。家系図を纏めたのは大きな成果であり、親戚を含めて勝海舟との繋がりを把握する事も出来ました。

さて、嘉納治五郎は、此の地に別荘を建てたのを機に柳宗悦や村川堅固を呼んでいますが、その根っ子にあったのは手賀沼の美しさに感動して、その美しさを共有したかったのであろうと、考えています。

白樺派の人達は、手賀沼の美を小説に見事に書き綴っています。

志賀直哉は、「雪の日」で、武者小路実篤も「或る男」で手賀沼の美を描写しています。

嘉納は、小説家ではないので、手賀沼を表現した文章は見ていませんが、手賀沼の美を守る活動に参加して貢献している。

大正初期に手賀沼の大規模干拓計画が立てられた。昭和初期の国営干拓事業計画に対して、杉村楚人冠を中心に大正15年秋に我孫子に別荘・住居を持つ文化人・財界人の地元有力者が「手賀沼保勝会」を作り、干拓反対運動を展開している。

嘉納は、このメンバーの一人として名を連ねている。

保勝会を設けた理由。

①我孫子は風光絶景の遊覧地として将来の発展が期待される事。

②東京に至近の別荘地としても住宅地としても最適の地である事。

③千葉県が淡水魚試験場の設置を決めたように、鰻他の美味なる淡水魚の産地の地である事。

更に、手賀沼保勝会の趣旨に沿って13名の連名で農林大臣に「手賀沼干拓計画中止の陳情書」を提出したと考えられているが、この陳情書には、見事に手賀沼の美しさが表現されている。

これらの展開を見ると、嘉納を初め当時の人達が如何に手賀沼を愛し守って来たのが良く分かる。嘉納は、名前だけの参加でなく、推進役の一人として活動している。

次に、纏めにもなるが、最近になって分かったことは、嘉納は、我孫子の別荘を「臨湖閣」と呼んでいたとの事である。機関誌「柔道」に記述されているとの情報もあるが、何時からこの名称を使用していたのか、とても気になる。隣の柳宗悦が住んでいる別荘は、「三樹荘」と命名している。

自分の別荘は、臨湖閣である。「荘」は、別荘の意味合いあいがあるけれど、「閣」は、御殿・高い見晴らし台など、高く構えた建物を表現している。嘉納は、住居に近い感覚で住んでいたのかも知れない。

一方、嘉納は手賀沼を、楚人冠にあてた手紙の中で「安美湖」と表現している。手賀沼を「心安らかに過ごせる美しい湖」と位置づけ、我孫子の別荘生活を過していた事になる。

こんな事を考えながら銅像を見ると、嘉納治五郎が、手賀沼を眺め和んでいるように思える。

嘉納治五郎の銅像建立は、これから特に我孫子でどんな暮らしや活動をしたのかを解明する切っ掛けになるであろう事を期待してします。当会も一翼を担いたいと考えています。

参考資料

①我孫子市史近現代編
②第4回杉村楚人冠展「楚人冠と景観保護活動」

（令和2年6月29日）

## 「聖火リレー復活の折には、是非我孫子に」

本年1月の役員会で、4月15日に予定されていた嘉納銅像除幕式と7月4日の銅像下を通る聖火リレーについて、様々な意見が交わされました。除幕式は市が優先して行う事、聖火リレーは走者と沿道の人々にいかに銅像建立をアピールしようかという事で、「嘉納治五郎銅像ここにあり」と白樺文学館の白い幟のようなものを立てよう等と活発に討議されたのが懐かしく思い出されます。

ところが新型コロナウイルス蔓延のため、東京オリンピックが1年延期、嘉納銅像除幕式も中止になるとは、あの時誰が想像し得たでしょうか？

こんな状況の中、当会会員で市会議員の海津新菜さんから、「来年の聖火リレーが実現した場合、縮小されて我孫子は通らないらしい」ということで、「我孫子に是非と請願に行きましょう」との申し出が越岡禮子さんにありました。越岡さんから、飯高美和子さん、佐藤やす子さんと私にお誘いがあり、是非嘉納銅像の存在をアピールしなければと皆、同意しました。

6月24日、曇り空の涼しい日に、女性4人（飯高さんは御用があり欠席）で県庁に向かいました。まずはオリンピック・パラリンピック推進局開催準備課の山崎幸忠氏を訪ね、発案者の海津さんが口火を切り、あとの3人もそれぞれに丁寧に懇願しました。昨年の大河ドラマ「いだてん」以来注目され、昭和15年開催予定の東京オリンピック誘致に尽力された嘉納治五郎が、実は我孫子に別荘を構え、そのことがキッカケとなり白樺派の面々がやって来るという、我孫子にとっても大切な人であり、そのことを市民、特に子供たちに知って貰う為に東京オリンピックの直前に銅像を建立しましたので、是非我孫子に聖火リレーを呼びたいと丁寧に懇願しました。

対応に当たられた山崎氏は「まだオリンピック自体の実現も危ぶまれている段階ですが、聖火リレー実現の折には皆さんのご意見を考慮しましょう。また、我孫子の良さと嘉納治五郎についての認識を深めました。」との良い感触を得て帰途に着きました。実現不可能な状況でも、最善を尽くす大切さを心に銘記しながら。

（村上智雅子）

## 将門伝説その荒唐無稽なるもの

戸田　七支（かずゆき）

我孫子の文化を守る会が今年度刊行する予定の40周年記念誌への原稿「将門の居館と王城」について既に出稿を終えてしまっているが、補足すべき点がいろいろと見つかった。本来ならば記念誌刊行後に補足説明するのが順序であろうが、これはこれで酒肴の一品にでもなればと献上する次第である。

我孫子の周辺に広く分布する将門伝説について、市史の原始・古代・中世篇にこう書かれている。「・・・相馬郡内もしくは我孫子市域内にかなり濃厚に分布する将門伝説の多くは将門の乱の史実とは直接には関係無いものと考えるべきである。・・・いかにその内容が荒唐無稽であり、あるいはまた迷信であるにせよ、伝説の存在それ自体は史実であり尊重されなければならない」と言っている。しかしこれでは説明が不十分である。伝説が何故存在し、何故尊重しなければならないかについて言及していない。

私はこの地方のみに存在するある伝説に注目した。「天慶三年公の戦没に遭うや其の遺臣等嘗て公が手賀村布瀬明神下より手賀沼を騎馬にて乗り切り湖畔の岡陵に登りて馬を繋ぎ旭日朝天を拝せし地域に於いて、一宇を奉祀し、公の神霊を迎えた」とある。湖北村誌に書かれている将門神社の縁起を物語る伝説である。ただ注意すべきは将門主従の霊魂が手賀沼を浮遊したと言う表現が削除されている事である。世も大正となれば人魂の存在を認めるわけにはいかなかった。それで騎馬にて手賀沼を渡ったとしたのであろう。一見あり得るようでそうではない。水牛でも不可能である。伝説を勝手に書き換えては困ると言うものだ。実はこの荒唐無稽（内容のない無意味）な伝説に重大な意味が隠されていると考える。古（いにしえ）の村人の将門に対する強い願望がこの特異な伝説を残した。更に述べるならば、将門の死後、戦勝軍による略奪と殲滅の惨劇を目の当たりにして、将門さまがいればこんな酷いことにはならなかったと言う思いがこの荒唐無稽な伝説を残したと思う。人魂となっても最後には戻ってきて欲しいと言う願望の表われである。したがって水中を潜ろうが空を飛ぼうが自由自在で良い訳である。霊魂となっても最後には戻って来るべきであると言う裏側にはそこが将門の本拠地、故郷であることを示しているのではないか。筆者はこの荒唐無稽な伝説をもとに将門記にある居館と王城を特定することに成功した。更に隠し味を加えよう。この荒唐無稽な伝説の出発点となる布瀬明神は今でも存在している。将門神社の南方2500m、旧沼南町にある鳥見香取神社である。神社の由来記に将門の乱により一切の宝物を焼失したと書かれている。将門の死後に起きた略奪により失ったものと考える。この近くには将門の有力な武将が住んでいたのではないか。

口直しに一品進ぜよう。桔梗御前のことである。将門記にはその名前は一切出てこない。理由は将門記の前半部の一部が欠落しているからである。30歳前後の将門が我孫子を本拠地として活動した頃であり、我孫子とそう遠くない木下の竹袋に桔梗御前が住んでいて不思議でない。尚、桔梗御前は佐原の海運を業とする牧野長者の娘と言われており、海に連なる木下竹袋に住むことは自然の流れである。

将門は叔父達との関係が険悪となった九三六年頃、豊田に前進基地を設けた。それと同時に桔梗御前も取手の長禅寺の近くに住居を移した。この地方にはその伝説が多く残っている。

口直しをもう一品、柏市にある紅龍山布施弁天東海寺が将門により焼き払われたと赤松宗旦の利根川図志に書かれている。乱暴者の将門ならやりかねないと思われるが、九三九年十二月、関八州を制覇した将門に対して朝廷は全国の社寺に乱の終息を祈願して奉幣師を派遣したと将門記に書かれている。成田山新勝寺へは僧寛朝が派遣されたのはご承知の通り、同様に朝廷の勅願所である布施弁天にも僧が派遣されたか或いは文章による通達であったか不明であるが、将門調伏の祈祷が行われたのは当然であろう。ここは将門の本拠地の近くであり、看過できずこれを焼き払ったと思う。

無理矢理にもう一品押し付けよう。吾妻鏡治承四年九月十九日の項にこう書かれている。藤原秀郷が偽って「お味方いたします」と言って将門の陣内に入ったところ、将門はうれしさのあまり、櫛で梳かしていた髪を結うことなく、すぐに烏帽子にいれて秀郷と対面した。秀郷はこの軽々しい様子を見て討伐しようと決意したとある。これは有名なエピソードで浮世絵にも描かれている。相馬内裏での出来事とされている。吾妻鏡の主人公源頼朝はこんな軽い人間ではないことを強調する記述であろうが、将門と秀郷が対面した相馬内裏こそ将門の居館、我孫子市中里1番地3号、今の湖北地区公民館であると考えます。

以上述べた数々は将門の青年期、我孫子に本拠地を置いていた時代の出来事で、将門記の前半部の欠落した部分に含まれる。従って将門記を唯一の資料として論理を進めているかぎり我孫子は一切登場しないし、その真相に迫ることは出来ない。（写真将門神社）

**「創立40周年記念誌」の原稿を募集します**

**締切り**　10月10日
**内容**　論文、随筆、俳句、短歌など自由です
**形態・デバイス**　デジタルファイルが望ましいですが、紙ベースでも構いません
**記念誌発行**　令和2年度中を予定しています

## 銅像台座への名前追加について

銅像建立後に、今回のプロジェクトの存在を知らなかった方や、建立を知って協力を申し出てくれた各方面の方などから、新たに寄附の申し出がありました。

「寄附者の全員の名前刻印」の原則から、その方々の名前を刻印して台座に取り付けることを決定しました。一方、本来記載されるべき数名の方について事務的なミスにより漏れや名前の表記ミスが見つかりました。就いてはそれらを併せて新たな銘板を作成します。取り付ける場所は台座の背面とします。

## 令和元年度「第23回手賀沼流域フォーラム」報告書刊行

「手賀沼流域フォーラム」は、手賀沼の水質の改善や流域の環境保全を進めるため、市民活動団体、流域7市（柏・我孫子・印西・白井・鎌ヶ谷・松戸・流山）、手賀沼水環境保全協議会が協働し、山階鳥類研究所の後援で開催している。2008年から「手賀沼の生物多様性をともに考えよう」をテーマとして、流域各地で、水質測定、自然観察会、文化・歴史散歩などを行っている。その地域での発見や情報を共有し、生物多様性について学ぶ場として、講演会やシンポジウムなども開催している。

今回、この一年間の企画と調査をまとめた報告書が出来上がった。

当会は毎年「川めぐりと木下の史跡散歩」を企画し、参加者から好評を得ているが、今回も参加者から「天候に恵まれ、ペースも合い、とても充実した一日でした。近い所にこんな良い所があったなんて驚きました。爽やかな秋の一日を過ごすことが出来ました」と感想を頂いた。

また当会の担当スタッフは企画者側として「手賀沼が木下地区の産業や文化、人々の生活に大きな影響を及ぼしたことを学びました。「手賀沼の外来水性植物の対策」レジュメを使って手賀沼の自然環境の現況を説明し、あらためて多くの参加者が大切さを感じられたと思います」と主催者に感想を報告した。

**以下は昨年実施の内容**

**イベント名「川めぐりと木下の史跡散歩」**
**企画：我孫子の文化を守る会**
**内容：船からの視察と史跡巡りで手賀沼の現況を知る。参加者の手賀沼環境保全の啓発。**
**（船での弁当代1，000円は個人負担）**
**日時：2019年10月10日（木）11時～15時30分**
**集合：印西中央公民館（木下駅より徒歩10分）**
**募集：18名（申し込みはハガキによる。）**

# 百人一首を楽しむ会（番外）

美崎　大洋

**記憶違いが多い歌（先頭の数字は百人一首の番号）**

17 ちはやぶる　神代も聞かず　竜田川
からくれなゐに（**水くぐるとは　水くくるとは**）
括り染めにする、「くぐる」ではない　　**在原業平朝臣**

25 名にし負はば　逢坂山の　さねかづら
（**人に知られで　人に知られて**）くるよしもがな
知られないでという意味、「知られて」ではない　　**三条右大臣**

35（**人はいさ　人はいざ**）心も知らず　ふるさとは
花ぞ昔の　香ににほひける
「いさ」は「さあどうだろうか」という意味、「いざ」ではない　　**紀貫之**

41 恋すてふ　わが名はまだき　立ちにけり
人知れずこそ（**思ひそめしか　思ひそめしが**）
「しか」は「こそ」の係り助詞に対応する助動詞「き」の已然形、「しが」ではない　　**壬生忠見**

90 見せばやな　雄島のあまの　袖だにも
ぬれにぞ（**ぬれし　ぬれじ**）色はかはらず
ひどく濡れたという意味、「ぬれじ」ではない　　**殷富門院大輔**

**百人一首の中で「紅葉、もみぢ」が詠まれている歌**

奥山に　紅葉ふみわけ　鳴く鹿の
声きく時ぞ　秋はかなしき　（5）

このたびは　幣も取りあへず　手向山
紅葉の錦　神のまにまに　（24）

小倉山　峰のもみぢ葉　心あらば
今ひとたびの　みゆき待たなむ　（26）

山川に　風のかけたる　しがらみは
流れもあへぬ　紅葉なりけり　（32）

嵐吹く　三室の山の　もみぢ葉は
龍田の川の　錦なりけり　（69）

**今月の雑学①**

**楓（かえで）・紅葉（もみじ）（旧かなでは「もみぢ」）**

楓（かえで）科。

・学名　Acer palmatum（いろはもみじ）

Acer：カエデ属

palmatum：掌（手のひら）状の Acer は「裂ける」という意味のラテン語に由来。

切れ込んだ葉っぱの形から。

**秋の紅葉（こうよう）がすばらしい。**

３００種もの園芸品種が江戸時代から作り出されている。楓（かえで）と紅葉（もみじ）は植物分類上は同じだが、楓のなかで特に紅葉の美しい種類を「もみじ」と呼ぶ説がある。また、盆栽や造園業の世界では、葉の切れ込みの数、切れ込み具合によって両者を呼び分けているらしい。

（例）【造園】かえで　→　葉の切れ込み（谷）が浅い
もみじ　→　葉の切れ込み（谷）が深い

英語では「かえで」「もみじ」とも「メープル」と呼び、カナダ産の「かえで」の樹液からとったものに「メープルシロップ」がある。

**紅葉（こうよう）は、落葉の前に葉の色が変わる現象**

一般に落葉樹のものが有名であり、秋に一斉に紅葉する様は観光の対象ともされる。カエデ科のものをモミジと言うが、実際に紅葉の主役を務める木の代表である。厳密には赤色に変わるのを「**紅葉（こうよう）**」、黄色に変わるのを「**黄葉（こうよう、おうよう）**」、褐色に変わるのを「**褐葉（かつよう）**」と呼ぶが、時期が同じためか、ともに「紅葉」として扱われることが多い。しかし、同じ種類の木でも場所が違えば時期も違う。それは気温や湿度に関係する。複数の現象が同時に進む場合もある。紅葉や黄葉が進行する条件は、日最低気温が 10℃以下になると進み色付き始めて、さらに5℃以下になると一気に進むとされる。美しい紅葉の条件には「昼夜の気温の差が大きい」「夏が暑く日照時間が長い」「夏に充分な雨が降る」「湿気が少なく乾燥している」などの条件が必要。紅葉の名所にはこの条件をよく満たす山間部が多い。

「もみじ」（旧仮名遣い：もみぢ）の名は、通説として、秋口の霜や時雨の冷たさに揉み出されるようにして色づく、「揉み出るもの」の意（「揉み出づ」の転訛「もみづ」の名詞形）であるという。

鹿肉のことを「紅葉肉」と呼ぶ。これには、百人一首の「奥山にもみじ踏み分け鳴く鹿の　声きくときぞ秋は悲しき」からとったという説と、「花札」の10月の絵柄に紅葉と鹿が一緒に描かれているからという説がある。

**今月の雑学②**

**なぞとき**

蚊帳の中から片足出したとかけて、
楠木正成　ととく①
曇りの日とかけて、
貧乏人の嫁入り　ととく②
鶯とかけて、
田舎の葬式　ととく③
鶯とかけて、
野辺の送り　ととく④
八歳馬とかけて
拒燧の中のふかし屁　ととく⑤
酒飲みとかけて、
花の蕾　ととく⑥

**その心は**

① あしかがせめる　②ふりそでふらない
③ なきなきうめにいく　④うめにきてなく
⑤ あけるとくさい　⑥今日もさけさけ明日もさけ

## 文学掲示板

### 令和二年九月展示作品（文学の広場）

千歳飴持ちてカメラに向ひみる
弾ける笑顔健やかにあれ　鎌田　トシエ

時をりにさざなみ走る池の面に
鳰鳥素早く潜きまた浮く　清野　八枝

濃い霧のわずかに薄れ竹やぶの
すずめの群れは一斉に飛ぶ　岩崎　明子

船頭の乗りたる如く花筏
流れにのりて追いつ追われつ　藤川　綾乃

郵便バイクの遠のく音をさびしみぬ
筆まめなる兄逝きてこのかた　納見　美恵子

三角にも丸くも線にもなるといふ
吾が感情の眼に表れて　美崎　大洋

### 楚人冠「序跋詩歌集」より　杉村楚人冠

**俳句**

昭和十一年　夏
瀬の月に鮎銀鱗のみだれかな
浴衣着てわが身にかへる宿居（とのゐ）かな
砂風呂を出て涼みけり星近く

**歌**

ちやうどよい處で御目にかゝりしと
いふ人に出あへりちやうどわるい處
目ざましを五分だけ早くかけおきて
起きて、もよきその五分をまどろむ

## 第二十三回短歌の会（最終採択の一首）

五月二十六日実施

「ステイホーム」あこがれて聞く人もあらん
ネットカフェなどに泊る人々　納見　美恵子

看護の日身を粉にしつつ生と死を
看取るひとらの辛苦をおもふ　佐々木　侑

若葉には木々それぞれのみどりあり
樹下道（こしたみち）にはマスク一色　村上　智雅子

無造作に夫に刈られし紫陽花の
二年過ぎてゆたかなる蕾　藤川　綾乃

洗顔に冷たき水を選ぶ朝
いつしか夏の来たるを知りぬ　美崎　大洋

土手の道にナガミヒナゲシ咲き誇り
ここが住処と風に揺れみる　飯高　美和子

年越さむみ堂に並ぶ竹灯籠
かつてなかりし今日の賑はひ　三谷　和夫

せつせつと心を語る人の欲し
膚重ぬることなどいらぬ　伊奈野道子

光りつつ小川流れて菜の花の
黄色ほのぼの岸辺にゆるる　大島　光子

□ **第138回史跡文学散歩について**

**「銅像見学を中心に治五郎ゆかりの地を巡る」**

日時　7月18日（土）9時我孫子駅南口バス停集合
講師　美崎大洋氏（当会会長）
コース　我孫子駅―（旧小熊家―鈴木屋―大光寺―三樹荘―嘉納治五郎別荘跡―楚人冠記念館―白樺文学館―旧村川別荘―子の神
（約3時間）
参加費　会員　無料　非会員　500円（30名）
申し込み美崎までTEL080-3410-4426

**（第137回「八柱霊園に我孫子ゆかりの偉人の墓と桜の花を訪ねる」は中止となりました）**

□ **「放談くらぶ」**

4月19日（日）予定の「アンクルンの会」（演奏）は中止となりました。

□ **プロジェクト「短歌の会」予定**

第二十四回短歌の会
日時　7月21日（火）13時30分～
場所　けやきプラザ10階大会議室

□ **プロジェクト「巨木植物観察会」**

**7月、8月は休会とします。**

**編集後記**　コロナ騒ぎで外出の際、マスクをするのが常態化した。マスクで顔の下半分を隠しているのに人物の識別には意外に不便を感じない。日本には「目は口ほどにものを言い」という諺があるように感情表現において目を重視する傾向がある。また日本の「阿吽の呼吸」「以心伝心」に対し欧米では会話が重要視され口元からその人の感情を重視するようだ▲日本ではサングラスで目を隠すのは何かやましいことがあると思われるが、欧米では逆にマスクで口を隠すのは病気でもあるのかと疑われるようだ。文化の違いだろう▲新型コロナウイルスの登場により、世界の至る処でマスク着用が標準となり、世界中の人が同じ格好をするようになったのは、皮肉と言わざるを得ない。（美崎）